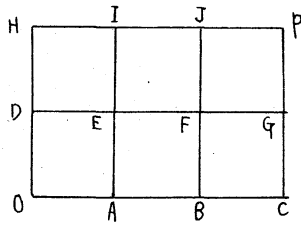


組合せ理論の基礎

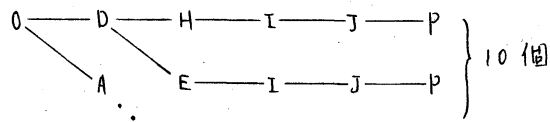
東海大 数学 成島 弘

組合せ数学と情報科学とのかかわりは“連続的情報を離散化する時点にまた離散的情報を処理する時点にある”と思う。数え上げ、グラフ、ブロックデザイン、LP、DP、有限幾何など多くの分野^(7~19)がある。本講演ではこれらの分野のなかでもっとも基礎的である計数(数え上げ)の理論について、60年代までの紹介と我々の結果の位置づけ及びいくつかの問題提起を試みる。ところで小学、中学、高校に於ては組合せ数学がどのように扱われていたのか興味をもち、教科書、参考書などを調べてみたのであるが、我々の小、中、高時代よりも整っていて重要視されていくように思われる^(1~4)。以下その時に^{の個数}出会った問題、道の数、クラスの数、2または3の倍数を求め^る問題、色ぬりの問題、などをもとにして論を進めてみる。

(1) ‘道の数’とある問題提起 「次の図で0からPへの最短通路の個数を求めよ」をいくつかの方法で考えてみる。



(1) 0 から始まり P まで すべて数之上 けていくと、求める個数は 10 となる。



(2) 0 から P までの点に座標を考へ、点 (m, n) までの道の個数を $p(m, n)$ であらわすと、 $p(m, n) = p(m-1, n) + p(m, n-1)$, $p(k, 0) = p(0, k) = 1$, なる漸化式^(*)により、点 P $(3, 2)$ までの道の数は $p(3, 2) = p(2, 2) + p(3, 1) = p(1, 2) + 2p(2, 1) + p(3, 0) = \dots = 10$ となる。

(3) 図でよこに 1 区画、たてに 1 区画だけ進むことをそれぞれ a, b なる記号であらわせば、 $aaabab, abbaab, \dots$ など記号の列で求める通路をあらわすことができる。すなわち全部で 5 区画進むうち a が 3 つ、b が 2 つあればよいから $5! / (3! \times 2!) = 10$ となる。一般に $p(m, n) = (m+n)! / (m! n!) = {}_{m+n}C_m$ と閉じた式で求めることができる。更に $(a+b)^r = \sum_{k=0}^r {}_rC_k a^k b^{r-k}$, $m+n=r$ と関数を考へることもできる。

このように同じ 10 個を求めるアルゴリズムにも、全くの数之上げ、漸化式、閉じた式と幅が広いかどうかがある。調べる対象の個数が有限のとき、全くの数之上げはいわば 自明解 であるが、組合せ的数は天文学的数より大きい(碁の盤面の可能性 $3^{361} \approx 1.74 \times 10^{192}$ に対して全宇宙に存在する陽子と電子の総数 $(3/2) \times 136 \times 2^{256} \approx 2.36 \times 10^{79}$ とのこと)から、⁽⁵⁾ 計算機を使、
 (4) パスカルの三角形を座標化したものと考えてもいい。

(調べてもすぐにだめになる。従、閉じた式が求まれば一番よいのであるが、少なくとも漸化式あるいは近似式が求まることが望ましい。また閉じた式や漸化式の存在についての基礎づけも興味深い。すなわち、全くの教之上げ、...、漸化式、...、閉じた式に到るアルゴリズムの理論を展開することが我々の課題となる。上の意味でのアルゴリズムの理論を考へるとき、組合せ論の多くの問題は我々に豊富な素材を与えてくれるものと思う。実際に個数を求める方法としては、函数解析的手法、代数的、集合関数論的手法など考へられるが素朴な組合せ論的直観も大切である。

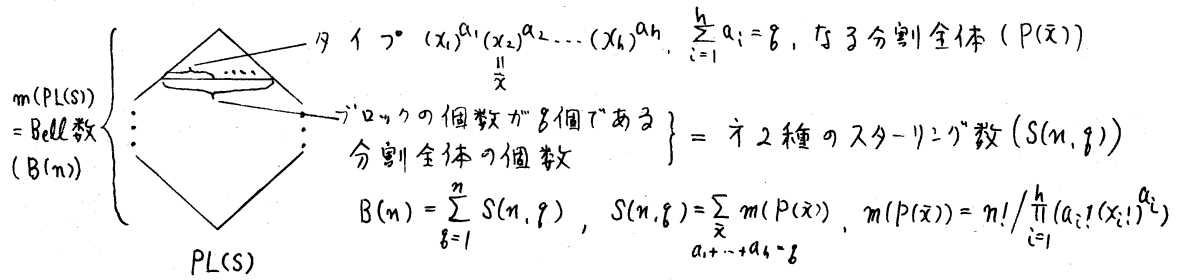
ここで C. Berge の考へ方 ([19] の what is combinatorics の章) について少しふれておく。記号 a, b, c による順列、組合せはそれぞれ $\{a, b, c\}$ から $\{1 \leq 2 \leq 3\}$ への単射、 $\{a, b, c\}$ から $\{0, 1\}$ への写像ととらえられる。このとらえ方はブルバキ [9], H. Sharp, Jr [10] を始め、日本でも宮本 [8], 森 [6], 小沢, 増島 [4] などによって指摘されている。このことを Berge は更にラテン方阵などいくつかの例をあげながら、一般的に次のように定義している。"a mapping of a set of objects into a finite abstract set with a given structure" によって "configuration" を定義し、代数が演算、解析が関数、トポロジーが連続を扱うように、組合せ論は "configuration" を扱うと述べている。こ

これは一つの考え方である。

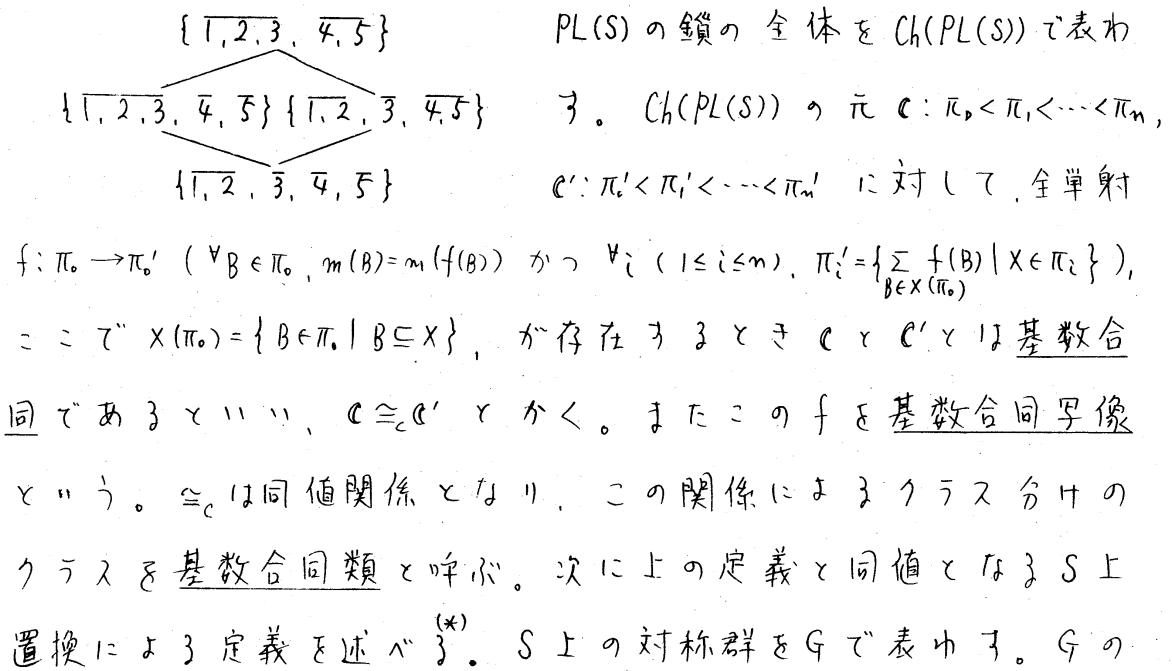
ところで(1)の問題を n 次元の道に拡張するならば、多項定理 $(a+b+c+\dots)^n = \sum (n! / p! q! r! \dots) a^p b^q c^r \dots$ の係数を考えればよい。 \sum は $p+q+r+\dots = n$, $p, q, r, \dots \geq 0$ についての和。

(2) "分割数"とある拡張 「相異なる5個のものがある、これを、2個、2個、1個の3つのグループに分ける仕方はいく通りあるか」。これは3項係数 $5! / (2!)^2$ を更に $2!$ で割って15通りとなる。3項係数に於ては、例えば $aaabbc$ と $abbaac$ とは区別されて2個となるが、うら又分けては区別されないので。一般に集合 S の個数 $m(S) = n$ のとき、 S の道分解で、 x_1 個の元からなる部分集合が a_1 個、 x_2 個の元からなる部分集合が a_2 個、 \dots 、 x_h 個の元からなる部分集合が a_h 個となるものはタイプ $(x_1)^{a_1} (x_2)^{a_2} \dots (x_h)^{a_h}$ なる S の分割 と呼ばれる。このタイプの S の分割の個数は $n! / \prod_{i=1}^h (a_i! (x_i!)^{a_i})$ であり、多項係数を $\prod_{i=1}^h (a_i!)$ で割ったものである。分割数は多くの組合せ論的問題にあらわれる。「 n 個の頂点をもつ 植木 (rooted tree) のうち非同型なもの個数」を $t(n)$ とすると、分割数を係数とする漸化式 $t(n+1) = (n+1) \sum_{\bar{x}} (n! / \prod_{k=1}^n (k! (k!)^{a_k}) \prod_{i=1}^n (t(i))^{a_i})$, \bar{x} は $(1)^{a_1} (2)^{a_2} \dots (n)^{a_n}$ なる自然数 n の分割、を得られる。この漸化式を用い指数関数的母関数 $T = \sum_{n=0}^{\infty} (t(n)/n!) x^n$ を考え、 $x = T/e^T$ とする。こ

(19) (by G. Dobinski) が示されている。



PL(S)の内部構造を考へないときは、分割数、Stirling数、Bell数で十分であるが、例へば下図のようなPL(S)の区間を考へる構造も考へる上で、各区間の間の同値関係による各クラスの個数を求める場合はどのように扱ふべきであろうか。この辺のことを我々は「基数合同」関係^(37~41)によって統一的にこの各クラスの不変量を導入する。



(*) 野崎昭弘氏の質問に suggest されて考へたこと。

元 α に対して, $\alpha: PL(S) \rightarrow PL(S)$, $\alpha(\pi) = \{\alpha(B) \mid B \in \pi\}$ を定めると,
 α は $PL(S)$ 上の置換となり, $\{\alpha \mid \alpha \in G\} = \tilde{G}$ は G と同型な $PL(S)$ 上の置換群となる。
 更に \tilde{G} の元 α に対して, $\hat{\alpha}: Ch(PL(S)) \rightarrow Ch(PL(S))$,
 $\hat{\alpha}(C) = \{\alpha(\pi) \mid \pi \in C\}$ を定めると, $\hat{\alpha}$ は $Ch(PL(S))$ 上の置換となり,
 $\{\hat{\alpha} \mid \alpha \in \tilde{G}\} = \hat{G}$ は \tilde{G} と同型な $Ch(PL(S))$ 上の置換群となる。
 $Ch(PL(S))$ の元 C と C' に対して, G の元 α が存在して $\hat{\alpha}(C) = C'$ となるとき $C \cong_p C'$ とかく。定義から次の補題が成り立つ。

補題 $C \cong_c C' \iff C \cong_p C'$

また $PL(S)$ の区間 $[\pi, \tau]$ と $[\pi', \tau']$ に対して, $f: [\pi, \tau] \rightarrow [\pi', \tau']$
 $(\forall \mu \in [\pi, \tau], f(\mu) \cong_c \mu)$ となる束同型写像が存在することと $\pi < \tau \cong_c \pi' < \tau'$ とは同値であり, 更に全単射 $f: Ch([\pi, \tau]) \rightarrow Ch([\pi', \tau'])$ ($\forall C \in Ch([\pi, \tau]), f(C) \cong_c C$) が存在することとも同値である。

次に長さ 0, 1 の鎖に対する, すなわち $PL(S)$ の元 β の区間に対する 基数合同類の不変量 を導入する。 $p(m)$ で自然数 m の分割全体の集合を表わし, $p(w)$ で成分が非負整数のベクトル w の分割全体の集合を表わす。ここで写像 η_s と θ_π とを次のように定める。 $\eta_s: PL(S) \rightarrow p(m)$, $\eta_s(\pi) = \{m(B) \mid B \in \pi\}$; $\theta_\pi: [\pi, I] \rightarrow p(w)$, $\theta_\pi(\tau) = \{\psi(\eta(X(\pi))) \mid X \in \tau\}$, $\exists X \in \tau$ ($X(\pi) = \{B \in \pi \mid B \subseteq X\}$), ψ は $(\bigcup_{k \leq m} P(k))^*$ の元 $\bar{x} = \{(1)^{a_1} (2)^{a_2} \dots (m)^{a_m}\}$ に対して $\psi(\bar{x}) = (a_1, a_2, \dots, a_m)$ をとる写像であり, $[\pi, I]$ は $PL(S)$ の区間, I は $PL(S)$ の最大元, $\eta = \bigcup_s \eta_s$, $\psi(\eta(\pi)) = w$ とする。このとき次の定理が成り立つ。

- 定理 (1) $\pi, \tau \in PL(S)$ に対して, $\pi \cong_c \tau \iff \eta(\pi) = \eta(\tau)$, すなわち π と τ は同じタイプ°, (2) $\pi < \tau \cong_c \pi' < \tau' \iff \mathcal{O}_\pi(\tau) = \mathcal{O}_{\pi'}(\tau')$,
 (3) $\pi < \tau \cong_c \pi' < \tau' \iff \eta(\pi) = \eta(\pi')$ から $\mathcal{O}_\pi(\tau) = \mathcal{O}_{\pi'}(\tau')$.

$C_\pi, C_{\pi(\tau)}, C_{\pi < \tau}$ で示すように, π を含む基数合同類, π を固定したときの $\pi < \tau$ を含む合同類, $\pi < \tau$ を含む合同類を表わすと定理から次の公式をえる。

公式 $\eta(\pi) = \{(x_1)^{a_1} (x_2)^{a_2} \dots (x_h)^{a_h}\}, \mathcal{O}_\pi(\tau) = \{y_1^{b_1} y_2^{b_2} \dots y_m^{b_m}\},$

$y_j = (y_{1j}, y_{2j}, \dots, y_{hj}), 1 \leq j \leq m$ とするとき,

(1) $m(C_\pi) = n! / \prod_{i=1}^h (a_i! (x_i!)^{a_i}), (2) m(C_{\pi(\tau)}) = \prod_{i=1}^h (a_i!) / \prod_{j=1}^m (b_j! \prod_{i=1}^h (y_{ij}!)^{b_j}),$
 (3) $m(C_{\pi < \tau}) = m(C_\pi) \times m(C_{\pi(\tau)}) = n! / (\prod_{i=1}^h (x_i!)^{a_i} \prod_{j=1}^m (b_j! \prod_{i=1}^h (y_{ij}!)^{b_j})).$

ここで p. 6 の例にのりて計算してみると, $\pi = \{1, 2, 3, 4, 5\},$
 $\tau = \{\overline{1, 2, 3}, \overline{4, 5}\}$ であるから $\eta(\pi) = \{(1)^3 (2)^1\}, \mathcal{O}_\pi(\tau) = \{(1, 1), (2, 0)\}$ となり,
 $m(C_\pi) = 5! / (2! \cdot 3!) = 10, m(C_{\pi(\tau)}) = 3! / (2! \cdot 1!) = 3, m(C_{\pi < \tau}) = 5! / (2! \cdot 2!) = 30.$

ところで, 後に述べる Burnside の補題を導くもとになる次のような置換群に関する定理がある。G を集合 X 上の置換群とする。 $x, y \in X, x \equiv y \iff \exists \alpha \in G, \alpha(x) = y$ と関係 \equiv を定めると、同値関係となる。 \equiv によるクラス分けのクラスを軌道と呼び、X の元 x を含む軌道を \mathcal{O}_x で表わす。

定理 $m(\mathcal{O}_x) = m(G) / m(G_x), G_x = \{\alpha \in G \mid \alpha(x) = x\}.$

この定理より, 今 G を S 上の対称群とし, $Ch(PL(S))$ 上の置換群 \hat{G} を考えよう, $G = \hat{G}, m(\mathcal{O}_e) = m(C_e), e \in Ch(PL(S))$ に注意

すなわち、我々の定義した不変量をもつ S 上の置換群 (基数合同不変群, i.e., G_c) の論を考へることが出来る。また自己基数合同群 (自己基数合同写像全体のなす群) と C の不変群 G_c , $c \in Cl(PL(S))$, とは少し異なるがこれらの関連、及び C の不変群は One (35) による同値関係上の自己同型群の拡張となっており、単項群 (monomial group) との関連も興味深い。

なお、 (π, I) , $P(u)$, $p(n)$, 長さ n の鎖 $C(n)$ の各順序集合間の関係が順序写像でとらえられている (37, 41) ことがもとになって半順序集合上の順序を保つ写像のクラスが詳しく調べられてい (38, 39) る。このクラスの意味づけとともに、"Scott Logic", 半順序集合上の反転公式 (後述), 半束上の和積定理などとも考え合せ、半順序集合上の計算論として展開できる可能性もある。

また、 $P(u)$ の母関数は $u = (u_1, u_2, \dots, u_n)$ に対して、

$$F(x_1, x_2, \dots, x_n) = \prod_{A_1=0}^{\infty} \prod_{A_2=0}^{\infty} \dots \prod_{A_n=0}^{\infty} (1 - x_1^{A_1} x_2^{A_2} \dots x_n^{A_n})^{-1} = \sum p(u) x_1^{u_1} x_2^{u_2} \dots x_n^{u_n}$$

ただし、 $A_1 = A_2 = \dots = A_n = 0$ は除く、 $p(u) = m(P(u))$ 。 $n = 1$ のとき数の分割の母関数となる。 $p(u)$ の漸化式や近似式を求めるとも一つの問題である。

(3) 小さいの公式と反転公式 「1 から 100 までの正の整数のうち、2 または 3 の倍数は全部でいくつあるか」 2 の倍数は $100/2 = 50$, 3 の倍数は $99/3 = 33$, 2 の倍数でありかつ 3 の

倍数である数は $96/6 = 16$ であるから $m(A \cup B) = m(A) + m(B) - m(A \cap B)$

によって、求める個数は $50 + 33 - 16 = 67$ となる。この一般

式は $m(\cup_{i \in I} A_i) = \sum_{J \subseteq I} (-1)^{|J|+1} m(\cap_{j \in J} A_j)$ であり、包除原理 (principle of inclusion and exclusion) (この邦訳はあまりよくない) ので 和積定理 という訳はどうか) と呼ばれている。^[15~19]

ところで「1から100までの正の整数で2も3も5の倍数でない

もの」は $m(\overline{A \cup B}) = m(\Omega - A \cup B) = m(\Omega) - m(A \cup B)$ より $100 - 67 = 33$

である。この一般式を ^[19] Benze は Sylvestre の公式 と呼んでいる。

更に Ω の集合族 $\{A_i\}_{i \in I}$, $m(I) = p$ のように p 個の集合に

属する元の個数は $\sum_{k=p}^p (-1)^{k-p} \binom{p}{k} \sum_{\substack{K \subseteq I \\ m(K)=k}} m(\cap_{i \in K} A_i)$, したがって $K = \emptyset$ に対

して $m(\cap_{i \in K} A_i) = m(\Omega)$, によって求まり、和積定理 ^(*) と呼ば

れる。これらの公式の具体的な問題への応用は [15~19] に豊富で

あり。ところでこれらの公式のうちでも、最も基本的な和積

定理は I 上の帰納法によって証明され、他の公式はこれから

導かれるか、ここでは G. Kato によって組織的に研究され、^[21]

組合せ理論に於けるその重要性が指摘された半順序集合上の

Möbius の反転公式から導いてみよう。

P を局所的有限な半順序集合、すなわち $\forall x \leq y$ in P に対し

て $m(x, y) < \infty$ とする。 $x \neq y$ に対して $f(x, y) = 0$ とする実数

値関数 $f: P \times P \rightarrow \mathbb{R}$ の全体を $A(P)$ とおく。 $f, g \in A(P)$, $\lambda \in \mathbb{R}$ に対

(*) $p=0$ のとき Sylvestre の公式となる。

して、和、スカラー倍、積を次のように定める。

$$(f+g)(x,y) = f(x,y) + g(x,y), \quad (\lambda f)(x,y) = \lambda(f(x,y))$$

$$(f \cdot g)(x,y) = \sum_{x \leq z \leq y} f(x,z)g(z,y)$$

これらの演算によって、 $A(P)$ は R 上の線形空間であり、更に積に関して結合律、分配律を満し、単位元としてクロネッカーの δ 関数 ($\delta(x,x)=1, \delta(x,y)=0, x \neq y$) を持つ。このとき $A(P)$ を P の incidence algebra と呼ぶ。

補題 (Wand) $f \in A(P)$ が逆元をもつための必要十分条件は $\forall x \in P$ に対して $f(x,x) \neq 0$ である。

f の逆元は次のように帰納的に定まる。

$$f^{-1}(y,y) = 1/f(y,y), \quad f^{-1}(x,y) = (-1/f(y,y)) \sum_{x \leq u < y} f^{-1}(x,u)f(u,y)$$

$A(P)$ の ϵ - μ 関数 $\zeta(x,y)$, Möbius 関数 $\mu(x,y)$ とはそれぞれ次のように定義され、互いに他の逆元となる。

$$\zeta(x,y) = \begin{cases} 1 & x \leq y \\ 0 & \text{その他} \end{cases}, \quad \mu(x,y) = \begin{cases} 1 & x=y \\ -\sum_{x \leq z < y} \mu(x,z) & x < y \\ 0 & \text{その他} \end{cases}$$

定理 (Hall-Möbius-Wand-Wecanen の反転公式) P を局所的有限な半順序集合とする。 P の元 z に対して $f(z)$ が定まり、 $\forall p \in P, \forall z \neq p$ に対して $f(x)=0$ とする。 z のとき $x \in P$ に対して

$$g(x) = \sum_{x \leq y} f(y) \quad \text{ならば} \quad f(x) = \sum_{x \leq y} \mu(x,y)g(y).$$

この定理の双対も成立する。古典的 Möbius 関数は自然数の集合に約数関係 ($x \leq y \iff y|x$) によって順序を入れることによ

1.

で導かれる。ここで和積定理を導くために必要なブール束上の Möbius 関数を求める。

補題 \mathcal{B} を n 個の元からなる集合の部分集合の全体 (順序は集合の包含関係) のなるブール束とする。このとき

$$\forall x, y \in \mathcal{B} \quad (x \leq y) \text{ に対して } \mu(x, y) = (-1)^{m(y) - m(x)}.$$

$\mathcal{B} \cong 2^n$, $2 = \{0 < 1\}$ によってわかるが, $m(y) - m(x) = r$ に関する帰納法によって, $r=0$ または 1 のとき成立, $r-1$ のとき仮定し

$$\begin{aligned} \text{て, } \mu(x, y) &= -\sum_{x \leq z < y} \mu(x, z) = -\left(\sum_{i=0}^{r-1} r_i (-1)^i \right) \text{ と仮定する, } \sum_{i=0}^{r-1} r_i (-1)^i \\ &+ (-1)^r = (1-1)^r = 0 \text{ より } \mu(x, y) = (-1)^r \text{ と仮定する.} \end{aligned}$$

ここで Ω の集合族 $\{A_i\}_{i \in I}$ を考え, $\mathcal{P}(I)$ の元 J に対して $f(J) = m(\bigcap_{j \in J} A_j \cap \bigcap_{k \in I-J} \bar{A}_k)$ と定め, $g(J) = \sum_{J \subseteq K} f(K)$ とおくと, 反転公式を用いて, $f(J) = \sum_{J \subseteq K} \mu(J, K) g(K) = \sum_{J \subseteq K} (-1)^{m(K) - m(J)} g(K)$ となる。 $g(K) = m(\bigcap_{i \in K} A_i)$ に注意すれば, $\sum_{m(J)=p} f(J)$, $f(\emptyset)$ は χ の χ^n 中の χ^p の公式, Sylvestre の公式と仮定してわかる。とくに $\bigcup_{i \in I} A_i = \Omega$ とおくと, $f(\emptyset) = 0$, $g(\emptyset) = m(\bigcup_{i \in I} A_i)$ であり,

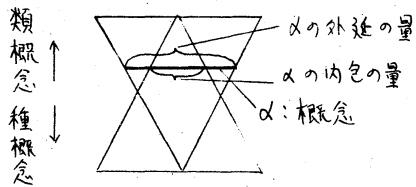
$$m(\bigcup_{i \in I} A_i) = \sum_{J \in \mathcal{P}(I)} (-1)^{m(J)+1} m(\bigcap_{j \in J} A_j), \text{ ただし } m(\bigcap_{i \in \emptyset} A_i) = 0 \text{ とおくと,}$$

となり和積定理が導かれる。

ここで $i \in I$ に対して, i なる性質をもつものの集合 A_i という関係をより一般的に考えれば, 古典論理学に於ける概念の内包と外延に関する ハミルトンの図 を思い出す。次にこのハミルトンの図と集合と関係によって形式的にとりよせてみる。

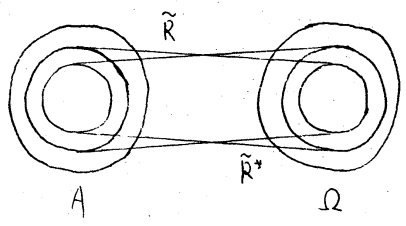
そしてこのところの方が我々の方法の基本となるのである。

(4) 和積定理のあるvariantと分割束上の和積定理



ハミルトンの図とは左図のようなもので、概念の外延の量と内包の量との関係を示めしてゐる。すな

わち、属性が多くなればなるほど、それらの属性をもつものが少くなり、ものが多くなればなるほど、それらの共通の属性が少なくなくなる。今、内包の集合を A とし、外延の集合を Ω とし、その間の関係を R とする。 $\tilde{R}: \mathcal{P}(A) \rightarrow \mathcal{P}(\Omega)$ を $\tilde{R}(a) = \{x \in \Omega \mid aRx\}$, $\tilde{R}(X) = \bigcap_{a \in X} \tilde{R}(a)$ によって定め、 $\hat{R}: \mathcal{P}(\Omega) \rightarrow \mathcal{P}(A)$ を R の逆関係 R^* によって定めると、 (\tilde{R}, \hat{R}) は ガロア対応⁽³⁴⁾ となる。非常に一般的に言うならば、 $X \in \mathcal{P}(A)$ に対して何らかの方法によって、 $m(\tilde{R}(X))$ を求めること及びその基礎づけが我々の課題となる。ここで A に束構造を考えた場合の1つの定理を導く。



その前に Baire に従って $X \in \mathcal{P}(\Omega)$ に対して $m(X)$ を少し拡張(ておく。⁽¹⁹⁾

$x \in \Omega$ に対して $m(x)$ を X の 測度 と呼び、 $X \in \mathcal{P}(\Omega)$ に対して $m(X) = \begin{cases} \sum_{x \in X} m(x) & X \neq \phi \\ 0 & X = \phi \end{cases}$ と定め、 X の 測度 と呼ぶ。 $m(x) = 1, x \in \Omega$ のとき、 $m(X)$ は X の個数となる。(L, ·) を有限半束とする。 L が上半束ならば、 \circ は "join" を意味し、

下半束ならば "meet" を意味する。 R を \mathcal{L} と Ω との間関係とし、 $\tilde{R}: \mathcal{L} \rightarrow \mathcal{P}(\Omega)$ を R によって誘導された写像とする。

半束上の和積定理 $\forall x, y \in \mathcal{L}$ に対して $\tilde{R}(x \circ y) \supseteq \tilde{R}(x) \cap \tilde{R}(y)$ ならば、

$$m\left(\bigcup_{x \in \mathcal{L}} \tilde{R}(x)\right) = \sum_{c \in \mathcal{C}} (-1)^{\ell(c)} m\left(\bigcap_{x \in c} \tilde{R}(x)\right)$$
 \mathcal{C} は \mathcal{L} の鎖の全体、 $\ell(c)$ は鎖 c の長さ、となる。この双対も成り立つ。
(41.42)

とくに \mathcal{L} として全順序集合を考へれば、普通の和積定理が導かれる。次に分割束について考へる。 S と T とを有限集合とし、 $\{f: S \rightarrow T\}$ を $\mathcal{F}(S, T)$ と表わす。分割束 $PL(S)$ と $PL(T)$ との積による束を $\forall (\pi, \tau), (\pi', \tau') \in PL(S) \times PL(T)$ に対して $(\pi, \tau) \wedge (\pi', \tau') = (\pi \wedge \pi', \tau \wedge \tau')$, $(\pi, \tau) \vee (\pi', \tau') = (\pi \vee \pi', \tau \vee \tau')$ と定め、 $PL(S) \times PL(T)$ とかく。このとき $PL(S) \times PL(T)$ と $\mathcal{F}(S, T)$ との間関係 Γ を次のように定める、
 $\forall (\pi, \tau) \in PL(S) \times PL(T), \forall f \in \mathcal{F}(S, T) \quad (\pi, \tau) \Gamma f \iff (\forall s, t \in S, s \pi t \rightarrow f(s) \tau f(t))$ 。

補題 Γ によって誘導された写像 $\tilde{\Gamma}: PL(S) \times PL(T) \rightarrow \mathcal{P}(\mathcal{F}(S, T))$ は $\forall x, y \in PL(S) \times PL(T)$ に対して、 $\tilde{\Gamma}(x \wedge y) \supseteq \tilde{\Gamma}(x) \cap \tilde{\Gamma}(y)$ かつ $\tilde{\Gamma}(x \vee y) \supseteq \tilde{\Gamma}(x) \cap \tilde{\Gamma}(y)$ を満たす。この補題と半束上の和積定理により次の定理をえる。

分割束上の和積定理 $PL(S) \times PL(T)$ の任意の部分半束 \mathcal{L} に対して、

$$m\left(\bigcup_{x \in \mathcal{L}} \tilde{\Gamma}(x)\right) = \sum_{c \in \mathcal{C}} (-1)^{\ell(c)} m\left(\bigcap_{x \in c} \tilde{\Gamma}(x)\right)$$
 \mathcal{C} となる。
(41.42)

とくに $S = T$ のとき $\mathcal{F}(S, T)$ を $\mathcal{F}(S)$ と表わし、 Γ の $PL(S)^2$ の対角集合 $\Delta_{PL(S)}$ への制限を δ と表わす。 $\Delta_{PL(S)}$ は $PL(S)^2$ の部分束であり、 $\gamma: \Delta_{PL(S)} \rightarrow PL(S)$, $\gamma(\pi, \pi) = \pi$ によって $PL(S)$ と束同型となるから、 δ によって誘導された写像を $\tilde{\delta}: PL(S) \rightarrow \mathcal{P}(\mathcal{F}(S))$ とかく。この

とき分割束上の初積定理から次の系をえら。

系 $PL(S)$ の任意の部分半束 \mathcal{L} に対して

$$m\left(\bigcup_{\pi \in \mathcal{L}} \tilde{\mathcal{J}}(\pi)\right) = \sum_{c \in \mathcal{C}} (-1)^{\ell(c)} m\left(\bigcap_{\pi \in c} \tilde{\mathcal{J}}(\pi)\right) \quad (40)$$

となる。

いくつかの注意 (1) $\tilde{\mathcal{J}}(\pi)$ は Ore [35] による π 上の自己準同型写像の全体と一致する。(2) Γ を $PL(S)^2$ に制限し、その逆関係によって誘導される写像 $\tilde{\beta}: \phi(\mathcal{F}(S)) \rightarrow \phi(PL(S)^2)$ を考えれば、 $\forall F \in \phi(\mathcal{F}(S))$ に対して、 $\tilde{\beta}(F)$ は J. Hantmanis と R. E. Steanna による“分割対”のなす分部束⁽³⁶⁾と一致する。また β の逆関係によって誘導される写像 $\tilde{\mathcal{J}}: \phi(\mathcal{F}(S)) \rightarrow \phi(PL(S))$ を考えれば、 $\forall F \in \phi(\mathcal{F}(S))$ に対して $\tilde{\mathcal{J}}(F)$ は Hantmanis と Steanna による“S.P. 分割”のなす分割束⁽³⁸⁾と一致する。(3) $m\left(\bigcap_{\pi \in c} \tilde{\mathcal{J}}(\pi)\right)$ が π をもとにして算術演算によって求まり、このことと上の系及び前出の基数合同類を用いて、自明でない“既約システムの数え上げ”が可能となる。⁽⁴¹⁾

(5) 置換群が作用した場合の数え上げの定理 “色ぬりの問題”をもちいて、Bunnside, Redfield, Polya, Bruinjn, Hanany^(25~31)らによる一連の定理を紹介する予定であったが、時間と紙面の都合により詳述は割愛し、我々のとらえ方⁽⁴¹⁾について少しふれておくにとどむ。グラフと置換群、あるいはブロック・デザインと置換群などについては後に機会があれば述べたいと思

)。またこの方面は数研共同研究集会“群論と組合せ論”に於て
 討論された⁽¹⁴⁾。

Burnsideの補題 X を有限集合とし、 G を X 上の置換群
 とする。 G による X の軌道 (遷移関係による同値類) の全体を \mathcal{O}
 と表わすと、 $m(\mathcal{O}) = (1/m(G)) \sum_{\alpha \in G} m(\tilde{H}(\alpha))$, $\tilde{H}(\alpha) = \{x \in X \mid \alpha(x) = x\}$ 。

H を $\forall x \in X, \forall \alpha \in G$ に対して $xH\alpha \stackrel{\text{def}}{\iff} \alpha(x) = x$ によって定まる関係
 とすれば \tilde{H} は H によって誘導された字像であり、 α をもとに
 して $m(\tilde{H}(\alpha))$ を求めることは \tilde{H} の基礎づけが我々の課題と
 なる。例として X, G として γ の γ の $\gamma(s)$, S 上の対称群を考
 え、 $f \in \gamma(S), \alpha \in G$ に対して $\tilde{\alpha}(f) = f$ ($f = f \circ (\dots \circ f \circ \dots)$) に対
 して $\tilde{\alpha}(f) = (\dots \frac{\alpha(f_0)}{\alpha(f_1)} \dots)$ と定める) と $\forall s \in S, \alpha f(s) = f(\alpha(s))$ とは同
 値であることに注意すれば、 $F \in \gamma(S)$ に対して $\tilde{H}^*(F)$ (H^* は H
 の逆関係) が A. C. Fleck によるオートマトン上の自己同型
 群⁽³³⁾ であり、また M. A. Harrison は $m(\tilde{H}(\alpha))$ を求めることによ
 って、同型なオートマトンを数え上げたこと⁽³²⁾ になる。

主な文献

- (1) 窪田 騰, 大須賀 康宏, 小学算数解き方辞典, 文英堂, 1971.
- (2) 藤崎 重佐五, 順列と組合せ, 科学新興社, 1968.
- (3) 早川 康式, 順列・組合せ, 旺文社, 1969.
- (4) 小沢 健一, 増島 高敬, 「順列・組合せ」を考へる, 数学セミナー, 1971, No.6.

(5) 伊理正夫, 順列・組合せの初歩, bit, 1971, Vol. 3, No. 1.

(6) 森毅, 順列と組合せ, 現代数学, 41-5, Vol. 4, No. 6.

(7) 数理解析, 特集「コンビナトリカセオリ」, 1969, Sept.
(古屋茂, 山本幸一, 新納文雄, 伊理正夫, 岩堀長慶, 岩堀信子)

(8) 宮本敏雄, 「写像と関数」2, 有限集合の写像 ^{-「順列と組合せ」-} 明治図書, 1964.

(9) 花谷, 村田 記, フリビキ数学原論「集合論2」の章 §5
東京図書, 1969.

(10) H. Sharp, 著, 大竹茂雄 訳, 組合せ数学入門, 東京図書, 1970.

(11) I. ニーベン 著, 寺田文行 訳, 選択の数学, -組合せ解析入門-
河出書房新社, 1970.

(12) 情報理論・実験計画法における組合せ数学の諸問題 I, II
数理解析研講究録, 82, 95.

(13) 数学とくに整数論, 組合せ論などの超大型計算, 数解研講究録
155.

(14) 群論と組合せ論, 数研共同研究集會予稿集, 1973年2月.

(15) J. Riordan, An Introduction to Combinatorial analysis, John-Wiley
1958.

(16) H. J. Kyser, Combinatorial Mathematics, pub. by Math. Asso. Amer. dist by
John-Wiley, 1963.

(17) M. Hall, Combinatorial Theory, Blaisdell Pub., 1967, Chap. 2.
(岩堀信子 訳, 組合せ理論, 吉岡書店, 1971)

(18) C. Liu, Introduction to Combinatorial Mathematics, McGraw-Hill, 1968.
(伊理正夫, 由美 訳, 組合せ数学入門, I, II, 共立全書, 1972)

(19) C. Benze, Principle of Combinatorics, Academic Press, 1971.
(野崎昭弘 訳, 組合せ論の基礎, 廿工社, 1973)

(20) G. Birkhoff, Lattice Theory, Amer. Math. Soc. Coll. Pub. Vol. XXV, 1967.

(21) G. C. Rota, On the Foundation of Combinatorial Theory, I., Theory of Möbius Functions, Z. Wahrscheinlichkeitstheorie 2 (1964), 340-368.

(22) L. Solomon, The Burnside Algebras of a Finite Group, J. Combinatorial Theory 2 (1967), 603-615.

(23) D. Smith, Incidence Functions as Generalized Arithmetic Functions I, II, Duke Math. J., Vol. 34, No. 4 (1967), 619-634, Vol. 36, No. 1, (1969), 15-30.

(24) R. L. Davis, Order Algebras, Bull. Amer. Math. Soc. Vol. 76, No. 1 (1970), 83-87.

(25) W. Burnside, Theory of Groups of Finite Order, 2nd ed., ^{Cambridge, 1911} Theorem VIII, P. 191.

- (26) J. H. Redfield, The Theory of Group Reduced Distributions, Amer. J. Math., Vol. 49 (1927), 433-455.
- (27) G. Polya, Kombinatorische Anzahlbestimmungen für Gruppen, Graphen, und Chemische Verbindungen, Acta Math., 68 (1937), 145-253.
- (28) N. G. De Bruijn, Generalization of Polya's Fundamental Theorem in Enumerative Combinatorial Analysis, Nederl. Acad. Wetensch. Proc. Ser. A, ⁽⁶²⁾ 1959.
- (29) F. Harary and E. M. Palmer, The Power Group Enumeration Theorem, J. Combinatorial Theory, Vol. 1, (1966), 157-173.
- (30) F. Harary, Graph Theory, Addison-Wesley, 1969, Chap. 15.
- (31) E. M. Palmer and R. W. Robinson, The Matrix Group of two permutation Groups, Bull. Amer. Math. Soc. 73 (1967), 204-207.
- (32) M. A. Harrison, A Census of Finite Automata, Canad. J. Math. 17, 1965.
- (33) A. C. Fleck, Isomorphism group of automata, J. ACM., 9 (1962), 469-476.
- (34) D. Ore, Theory of Graphs, Amer. Math. Soc. Coll. Pub., Vol. xxxviii, 1962, Chap. II.
- (35) D. Ore, Theory of equivalence relations, Duke Math. J. Vol. 9 (1942).
- (36) J. Hantmanis and R. E. Stearns, Algebraic Structure Theory of Sequential Machines, Prentice Hall, Inc., 1966, Chap. 2, 3.
- (37) H. Narushima, A Theory of Partitions I, n -order maps, partitions and cardinal congruences -, 1970.
- (38) H. Narushima, Order preserving maps and Classification of partially ordered sets, Proc. Fac. Sci. Tokai Univ., Vol. VI (1970).
- (39) M. Kami and H. Narushima, Further results on order maps, Proc. Fac. Sci., Tokai Univ., Vol. VII (1972).
- (40) H. Narushima, Partitions and Principle of inclusion-exclusion, master thesis, Tokyo Univ. of Education, 1969.
- (41) 成島 弘, On the number of minimal automata with n states, Principle of inclusion-exclusion on the family $\mathcal{L}(PL(S))$, Some properties of intervals in $PL(S)$ and numerical results in sequential machines, Order maps 1-7 (大矢氏と共同), Two Galois connection in automata theory, Order maps 1-7 (大矢氏と共同), Two Galois connection in automata theory, Order maps 1-7 (大矢氏と共同), Under maps on partitions, Principle of inclusion and exclusion on semi lattices, 応用数学分科会予稿集, 1968年5月 ~ 1972年10月.
- (42) H. Narushima, Principle of inclusion-exclusion on semi lattices. (to appear)
- (43) H. Narushima, Combinatorial Theory of Partitions (to appear).